夢を越えて生き方を考える

～「総合的な学習の時間」を中心とした小学校でのキャリア教育の取り組み ～

相武台小学校　竹内　玲菜

Ⅰ　研究のねらい

子どもの貧困率１６．３％
（ＯＥＣＤ加盟３４か国中、１０番目に高い）
ひとり親世帯の貧困率５４％
（ＯＥＣＤ加盟３４か国中、最も高い）

これが先進国と呼ばれる日本の現実である。一般的な感覚として、日本に貧困で苦しむ方がいるというのは理解しがたいものかもしれない。しかし、日々子どもに接している我々教職員からするとこの数字は実感を伴って理解できるものではないだろうか。さらにいえば日本は現在超高齢社会である。広がり続ける格差と歯止めのきかない少子化。今私たちが接している子ども達の未来は、決して明るいとはいえないのが現実だ。

政府は貧困対策として、平成２５年「子どもの貧困対策の推進に関する法律」を制定した。その中では、家庭の経済的支援を中心としたさまざまな具体的方策が示されているが、学校に対しては、

貧困の連鎖を断ち切るためのプラットフォームとして学校を位置付け、総合的な子どもの貧困対策を展開する。

ことが求められている。そして、学校教育による学力保障も大きな役割として明記されている。学力とは何かという議論についてはさまざまな見解があるが、現行の学習指導要領では、特に「生きる力」をはぐくむことが求められていることは周知の事実である。そこで今回私は、全ての子どもの「生きる力」=生きていく原動力を育てる取組として、キャリア教育に焦点を当てた。目先の進学・就職だけでなく、未来の自分を見つめ、「夢を越えて、自分自身の生き方を考えながら人生を歩んでほしい」と１年間総合的な学習の時間を中心に実践した概要や成果と課題を以下に記載していく。

Ⅱ　キャリアとは

みなさんはキャリアという言葉を聞いて何をイメージするだろうか。小学校キャリア教育の手引き〈改訂版〉によると、

「キャリア」（ｃａｒｅｅｒ）はもともと英語で、競馬場や競技場のコースやトラックを意味するものであった。そこから、人がたどる行路やその足跡、経歴、遍歴なども意味するようになった。

そうだ。さらに、

２０世紀後半の産業構造の新たな変革期を迎え、「キャリア」は、特定の職業や組織の中での働き方にとどまらず、広く「働くこととの関わりを通しての個人の体験のつながりとしての生き様」を指す。

と変化していき、現在のキャリア教育という言葉につながる。このことをふまえ同書では、

キャリア教育の「キャリア」を人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねととらえる。

とされている。また、中央教育審議会答申では、キャリア教育とは、

一人一人の社会的、職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育。

と定義されている。

この定義をふまえるとキャリア教育で大切にすべき視点は「社会的」「職業的」という二つの側面から児童生徒の自立を考え、それに向けて基盤となる態度や必要な力を育てることと解釈できる。決して、職業体験活動や短期的な進路決定などの職業的な意味だけではないことをあえて記述しておく。

Ⅲ　なぜ小学校で「キャリア」なのか

ＪＡＸＡ名誉教授・技術参与であり、さがみ風っ子教師塾の塾長を務める的川泰宜氏によると「世の中のために生きたいとか、人より出世したいとか、お金持ちになりたいとか、人生の基本ができるのは小学校５年生くらい」だという。実際に、平成２７年度全国学力・学習状況調査では、全国で８６．５％の児童が「当てはまる」もしくは「どちらかといえば当てはまる」と答えている。

平成２７年度学力・学習状況調査児童質問紙（９）「将来の夢や目標をもっていますか」

	当てはまる	どちらかといえば当てはまる
全国	７０．５％	１６．０％

一人ひとりの子どもがもつ夢からスタートし、その夢の先にある、自分自身の生き方を考える機会を保障する。そして、

「自分の目標にカベがあってもぐっとこらえて、くじけても立ち上がって前に進む（後述するＣさんの言葉より引用）」

力を育てることが、小学校の学びの集大成として、必要なことだと考えた。

Ⅳ　実践の概要

１　対象児童について

対象児童　相武台小学校　６学年　５５人（支援級児童を含む）

期間　　平成２７年４月から１年間

今回対象とした児童は、５年生のときから私が２年間関わった子ども達である。学年全体で５０人前後、２クラスの学年だったため毎年総合的な学習の時間は学年で取り組んでいた。それ以外にも交換授業などを積極的に行っていたため「クラス」の枠組みにとどまらず「学年」として２年間で５０人前後の児童に関わってきた。今回の総合も、もちろん学習の初めからまとめに至るまで、全て学年で取り組んだものである。

彼らの実態を端的に表す、データがある。本校ＰＴＡが発行している広報誌「わかあゆ」に載っている《習い事アンケート集計》である。これによると、習い事をしていない子の割合が以下のようになっている。

☆習い事アンケート集計☆
＊各学年男女別習い事ランキングＢｅｓｔ５！！（但し、複数回答による）＊

		1位	2位	3位	4位	5位	していない
1年	男	水泳	体操	サッカー	英会話	ダンス	19%
	女	ピアノ	水泳	体操	英会話	ダンス	13%
2年	男	サッカー	水泳	体操	そろばん	習字	13%
	女	ピアノ	水泳	ダンス	体操	そろばん	9%
3年	男	水泳	体操	サッカー	ピアノ	英会話	7%
	女	ダンス	水泳	ピアノ	体操	英会話	13%
4年	男	サッカー	水泳	野球	体操	そろばん	8%
	女	そろばん	ピアノ	ダンス	学習塾	英会話	7%
5年	男	学習塾	サッカー	英会話	水泳	体操	7%
	女	ピアノ	英会話	学習塾	習字	ダンス	3%
6年	男	学習塾	野球	体操	英会話	バスケ	22%
	女	学習塾	ピアノ	習字	ダンス	バドミントン	7%

注目していただきたいのは、習い事をしていない子の割合である。習い事をしている子の割合は、学習塾に通い始めるなどの理由から、高学年になるほど増えていくのが一般的である。しかし、今回の対象学年である６年生は他の学年に比べて、習い事をしている子どもの割合が著しく少ない。男の子に限ってみると、５年生とはなんと１５％もの差があるのだ。これは、「モデルとする大人との出会い」が少ないことを物語っている。

そんな彼ら６年生に対して、１年間総合的な学習でキャリア教育の授業を実践し多くの大人との出会いから、自己の生き方を見つめ直す機会をたくさん設けたいという思いから始まったのが今回の取組である。総合的な学習の時間における１年間の概要を以下に示し、Ⅴ章では３人の子どもにスポットを当て、その変容を追っていきたい。

２　第６学年総合的な学習の時間における１年間の取り組み

（１）【夢は口に出すと強い】

４月当初～５月下旬

「夢は口に出すと強い」を合い言葉に一人ひとりの今の夢を掲示し、(図１）夢を叶えるために、まずは身近な学習や生活を整える大切さを確認した。

（図１）

（２）【夢から仕事へ】　　５月下旬～７月

「１本の鉛筆の向こうに」という絵本を題材に身の回りには仕事があふれていることを知った。その後、身近な人へのインタビューや、映像資料を使っての学習で、さまざまな仕事について調べた。

Ex）身近な人…学校で働く人

映像資料①白鵬（相撲）

②新津春子（羽田空港ビル清掃）

（ＮＨＫ「プロフェッショナル」より）

（３）【お仕事調べにでかけよう】

７月～夏休み中

夏休みの宿題として

①　自分が興味をもった仕事をしている人 ②　おうちの人の仕事

について調べる活動を行った。事前学習として、直接会って話をするときと、メールを書くときのやり方をロールプレイングで学んだ。

（４）【「人と関わる三日間」（修学旅行）】

９月２３日～２５日

修学旅行で関わる人を確認し、誰か一人に焦点を絞って調べ学習をした。そして修学旅行中は、それぞれの人に直接インタビューする時間を設けた。今回はのべ１２人に質問タイムを取っていただいた。

（子ども一人あたり１０人程度から話を聞くことができた）その後、学校に戻ってきてからはそれぞれが質問して得た情報を共有し、国語の学習と関連させながら、「〇〇さん紹介」の新聞づくりを行った。

（５）【発表集会で全校の友だちに伝えよう】

１０月

相武台小学校には、発表集会といって、各学年が学習した内容を、１０分程度で発表する集会がある。今回は半年間の総合での学びを、劇の形で全校に伝える活動を行った。この時、宿泊先にかざってあった詩「ありがとうは幸せになる魔法の言葉」をヒントに「修学旅行で出会った多くの人は『ありがとう』と言われることを仕事の原動力としている」と気づく子どもが出てきた。

（６）【自分の夢を月に飛ばそう】　　１１月

大塚製薬が行っている「ルナドリームプロジェクト」に参加した。このプロジェクトは、２０１６年に子ども達の夢とポカリスウェットを月に届けようと、大塚製薬が取り組んでいるものである。多くの企業と協力しながら夢を叶えようとしている大塚製薬の方々の姿を知った後、宇宙に送る自分たちの夢を書いた。

（７）【ＳＣ相模原の選手から学ぼう】

１１月

ＳＣ相模原が取り組んでいる社会貢献活動である「夢授業」に参加した。３名の選手にサッカー教室を開いていただいたあと、教室で夢についての話を聞いた。

（８）【相武台フェスティバルで発表しよう】

１１月～１月

相武台小学校では１年に１回行われる「相武台フェスティバル」がある。各クラスが生活科や総合で学んできたことを全校の友だちや地域の方、保護者の方に向けて発表するものだ。６年生は一人５分のスピーチ形式を取り、その中で自分がこれまでの学びで得たこと・大切にしたいと思う四字熟語を伝えた。この四字熟語は書き初めで全員が書き、卒業

式のとき掲示した。四字熟語を選んだり、これまで学んできたことを振り返ったりする中で、自分は誰からどんなことを学び今後どう生きていきたいのかと、仕事から生き方に目が向き始める子どもが出てきた。

（９）【仕事から生き方へ】　　１月～３月

国語「生きる」の詩をモデルに「自分にとっての生きる」を詩でつくる活動を行った。文章を実際に卒業文集に記載した子もいた。卒業式では、一人ひとりが壇上で「自分の夢」や「感謝の思い」を話す。この言葉もここで考えた。また、卒業記念制作では、未来の自分の姿を描いたお皿を作り、卒業式の会場に掲示した。

(10)【国会・最高裁判所に行こう】　　３月

この時期に国会見学に行く活動は毎年行っていたが、この国会見学を「国の政治に関わる人の仕事を知ろう」と捉え直し、国会・最高裁判所見学として行った。国会では、参議院の模擬法廷を体験する中で、実際の法律の作られ方を知った。

(11)【夢は必ず叶うとは限らない】　　３月

シンガーソングライターのスガシカオさんについて特集されたＮＨＫ「プロフェッショナル」を題材にまとめの学習を行った。テーマは「はたしてスガシカオさんの夢は叶わなかったのか」である。高校教師という夢をもっていたスガシカオさんは、その夢を叶えることはできなかった。しかし「誰かに言葉を届ける仕事をしたい」というスガシカオさんの思いは形をかえ、シンガーソングライターとして実現した。このことから「今、自分がもっている夢がそのまま叶うとは限らない。だから、夢をこえて生き方【自分自身の核】を探していくことが大切である。」と伝えた。

３　意識して取り組んだこと

本実践では、子どもの意識が《夢→仕事→生き方》と変わっていくように学習活動を組んでいった。また、各段階において、国語・社会・図工・道徳・体育・外国語・特別活動での学習を「キャリア教育」の視点で捉え直し、関連づけながら行った。

Ⅴ　個別の児童の変容

ここからは三人の児童に焦点を絞って、それぞれの学習活動における変容を追っていきたい。下の表は、Ａ・Ｂ・Ｃそれぞれの児童の変容が、特に見られた学習活動を一覧にしたものである。

	主な学習活動	A	B	C
夢	（１）夢は口に出すと強い	○		
仕事	（２）夢から仕事へ			
	（３）お仕事調べにでかけよう	○	○	
	（４）「人と関わる三日間」（修学旅行）	○		
	（５）発表集会		○	○
	（６）自分の夢を月に飛ばそう	○		
	（７）ＳＣ相模原の選手から学ぼう			○
	（８）相武台フェスティバル	○	○	○
生き方	（９）仕事から生き方へ			○
	（１０）国会・最高裁判所に行こう			
	（１１）夢は必ず叶うとは限らない			○

１　歯医者になりたいＡさん

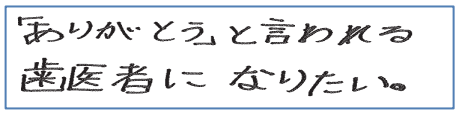
小さいころから歯医者に通い、そこでの思い出から歯医者になりたいという夢をもっていたＡさん。（１）【夢は口に出すと強い】では、ウェビング図を用いて「夢をかなえるために必要なこと」を書いた。この時は歯の病気を調べる、道具の名前を知る、しっかり授業を受けるなど、直接的な学びについてのみ書かれている。

Ａさんのターニングポイントは、（３）の【お仕事調べにでかけよう】と（４）【人と関わる】の修学旅行だった。その２つで学んだことを、Ａさんが（８）【相武台フェスティバルで発表しよう】で発表していたので、その内容を以下に引用する。

私は自分の夢の職業、歯医者さんにインタビューをしました。私がインタビューして驚いたこと、それは、先生がもとから歯医者になる気はなかったということです。その質問の後、私は「(仕事をしていて) 嬉しかった事はなにか。」という質問をしました。すると先生は、「歯の痛みで食事ができなかった人の歯を治してあげて、食事ができるようになり、『ありがとう』と言われたとき。」と言っていました。私はこれが（自分の）新しい夢へのきっかけだと思います。次に私は修学旅行でいろんな方に出会いました。バスガイドさん、ホテルの方、添乗員さん、出会った方みなさんが「よかったよ」「ありがとう」と言われることがなによりもうれしいそうです。
（書き初めで書いた四字熟語を見せながら）
みなさんはこの一陽来復という言葉を知っていますか。この言葉の意味は［よくないことが続いた後によいことがめぐってくる］という意味です。私はこれが仕事に例えられると思います。なぜなら仕事があんまりうまくいかないとき、ありがとうという言葉一つでがんばれるからです。だから私は、将来仕事がうまくいかなくても「ありがとう」といわれるようにがんばりたいと思いました。

このように出会った多くの方が、仕事を通して「よかった」と言ってもらえることに喜びを感じていることを知ったのだ。また、Ａさんは、修学旅行で宿に飾ってあった「ありがとうは幸せになる魔法の言葉」という詩にも出会う。これらの経験から、Ａさんの中で「ありがとう」がキーワードになっていく。そんなＡさんは、（６）【自分の夢を月に飛ばそう】で、月に送る夢としてこんな言葉を書いている。

図２



こうしてＡさんの夢には「ありがとうと言われる」という一言が付け加えられた。

２　ゲームクリエイターになりたいＢさん

非常にこだわりの強いＢさん。５年生までは､友だちの意見を聞き入れることも苦手で、学級会などで一度自分の意見を口にしてしまうと、なかなか友だちの意見を受け入れられない児童だった。（５）【発表集会で全校の友達に詳しく伝えよう】の初めに行った半年間のふりかえりでは、

Ｑ，４月　どんな「夢」をもち、どんな取り組みをしましたか。
Ａ，ゲームクリエイター。
Ｑ，４月から１０月までの「総合」で学んだことや印象に残っていることはなんですか。
Ａ，特になし。
Ｑ，今「夢」というものに対してどんなことを考えていますか。またどんなことを知ったり、取り組んだりしたいと考えていますか。
Ａ，特になし。

と答えている。

少しさかのぼって、Ｂさんは（３）【お仕事調べに出かけよう】で、二人の人にインタビューをした。一人は、車の部品開発の仕事をしている自分のお父さん。もう一人は、ゲームクリエイターをしている同じクラスのＤさんのお父さんである。Ｄさんのお父さんには手紙でインタビューをしている。その時の質問は

Ｑ１，なぜその仕事をしようと思ったのか。
Ｑ２，どんなところが楽しい／大変か。
Ｑ３，働くうえで大切にしていることは。

であった。

この二人に対するインタビューをうけて、Ｂさんがどう変容したか。先ほどの（５）１０月の時点では、目に見える変化は現れていなかった。しかし、（８）【四字熟語で学びを伝えよう】で彼が選んだ四字熟語は「管中随馬（かんちゅうずいば)」である。広辞苑によると、「管中随馬」とは、［聖人の知恵を借りること。または、昔の人の経験を尊重することのたとえ］とある。Ｂさんにとって、昔の人とはおそらく自分のお父さんとＤさんのお父さんのことであろう。これまで他人の意見に耳を傾ける意味を感じてこなかったＢさんが、この四字熟語を選んだことは私にとって大きな驚きだった。その意識の変化について

（８）１月の発表の中でＢさんは、

> お父さんは、「相手といろいろな対応を話し合って決めることが大切だ。」と言っていました。この考えは他の人と仕事をする上で最も重要なことだと思いました。年上の人の意見を尊重すること。それは必ずしも正しいとは限りません。ですが、年上の人の言うことには教訓になることがあるかもしれません。ですから（発表を聞いている人たちには）管仲随馬を心がけてほしいと思います。

と述べている。

おそらく１０月の振り返りの中で言語化して表出してこなかったＢさんの意識が、１２月に改めて学習を振り返り、さまざまな四字熟語に触れる中でこの想いにたどりついたのではないだろうか。

Ｂさんはゲームクリエイターという夢を一年間口に出し続けた。そのこと以上に「年上の人の意見に耳を傾けること」が大切だという気づきがＢさんにとって大きな学びだったのではないだろうか。身近な大人の姿から学びを得られたことも、彼にとって重要なことだったと感じている。

このころから教室でのＢさんの様子も少しずつ変わり始め、学級会の中では、「〇〇さんの意見を聞いて、自分の考えが変わりました。」という発言も聞かれるようになり、少しずつ周りの友達の意見に耳を貸し始めるようになっていた。

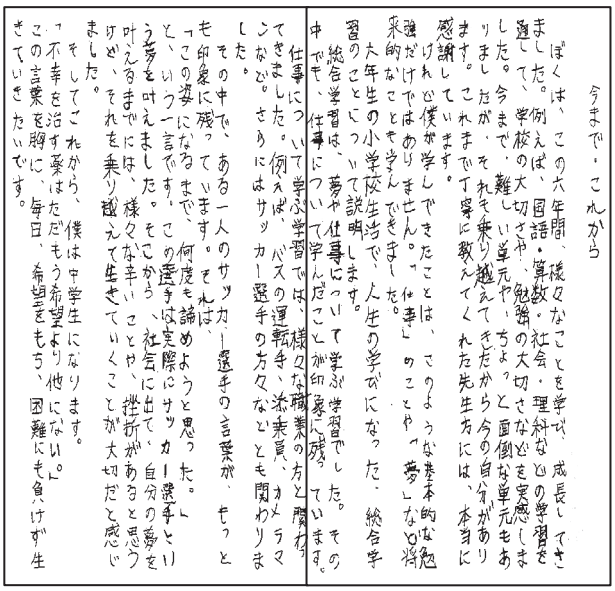
３　夢がないＣさん

Ｃさんは、４月に学習を始めた頃から、「自分には夢がない」ということを口に出していた。自分の夢が見つからないことにとても苦しんでいたようにも思う。それだけでなく、今の自分の状態や自分を取り巻く環境が冷静に分析できるＣさんだからこそ、一つひとつの出来事に対して深く考え込み、もがき苦しむことが多かった。（５）【発表集会】では、

> Ｑ，４月　どんな「夢」をもち、どんな取り組みをしましたか。
> Ａ，夢がないです。
> Ｑ，今「夢」というものに対してどんなことを考えていますか。またどんなことを知ったり、取り組んだりしたいと考えていますか。
> Ａ，夢を見つけたいです。

と答えている。

そんなＣさんが（６）で選んだ四字熟語は「独立不撓（どくりつふとう）」だ。意味は［１、人に頼りすぎず、自分で道を切り開く。２、どんな苦難や困難があってもくじけない。］である。なぜ彼がこの言葉にたどりついたのか。その答えは彼が書いた卒業文集の中にある。自分の思いや経験をとても客観的に、そして分かりやすくまとめているので、その全文を紹介したい。



今まで・これから

ぼくは、この六年間、様々なことを学び、成長してきました。例えば、国語・算数・社会・理科などの学習を通して、学校の大切さや、勉強の大切さなどを実感しました。今まで、難しい単元や、ちょっと面倒な単元もありましたが、それを乗り越えてきたから今の自分がありますが。これまで丁寧に教えてくれた先生方には、本当に感謝しています。

それに僕が学んできたことは、さのような基本的な勉強だけではありません。「仕事」のことや「夢」など将来的なことも学んできました。

六年生の小学校生活で、人生の学びになった、総合学習のことについて説明します。

総合学習は、夢や仕事について学ぶ学習でした。その中でも、仕事について学んだことが印象に残っています。

仕事について学ぶ学習では、様々な職業の方と関わってきました。例えば、バスの運転手、添乗員、カメラマンなど。さらにはサッカー選手の方々などとも関わりました。

その中で、ある一人のサッカー選手の言葉が、もっとも印象に残っています。それは、

「この姿になるまで、何度も諦めようと思った。」

という一言です。この選手は実際にサッカー選手という夢を叶えました。そこから、社会に出て、自分の夢を叶えるまでには、様々なことや、挫折があると思うけど、それを乗り越えて生きていくことが大切だと感じました。

そしてこれから、僕は中学生になります。

「不幸を治す薬はただもう希望より他にない。」

この言葉を胸に、毎日、希望をもち、困難にも負けず生きていきたいです。

文集の中で特に印象的なのは、サッカー選手との出会いの部分である。（７）【ＳＣ相模原の選手から学ぼう】では、三人の選手と思いっきり体を動かした後、三人からこれまでの経歴や今の自分について話してもらい、子どもたちから質問する時間をいただいた。その中である一人の選手は、

中学校までレギュラーになれず、「もうサッカーをやめよう。」とあきらめかけていた。そんな時、監督に一度だけチャンスをもらい、そこでの活躍から再びサッカーを続けようと思い直した。

と語っていた。悩み苦しんだ末に今はキラキラと輝いている大人の姿を目にしたＣさん。その姿から、自分自身の生きていく核を見つけることができたのだろう。この出会いはおそらくＣさんにとって一生忘れることのできないものになったのではないだろうか。そんなＣさんが一年間の学習のまとめで行った、(11)【夢は必ず叶うとは限らない】で書いたのが前述の言葉である。

めあて（教師より提示）
夢を越えて自分の核を探す
まとめ（彼自身の言葉で）
自分の目標に壁があっても、ぐっとこらえて、くじけても立ち上がって前に進みたい。

Ⅵ　成果と課題

１　成果

総合的な学習の時間の目標は、

横断的･総合的な学習や探求的な学習を通して、（中略）自己の生き方を考えることができるようになる。

である。Ⅲ章では、全国の多くの子どもが「将来の夢や目標をもっていますか」という質問に対して当てはまると答えていることを書き記した。ここで本校の子ども達との比較をしたいと思う。

本校では、当てはまると答えている子の割合がなんと全国よりも１４％近く高い。

平成２７年度学力・学習状況調査児童質問紙
（９）「将来の夢や目標をもっていますか」

	当てはまる	どちらかといえば当てはまる
全国	７０．５％	１６．０％
本校	８４．６％	７．７％

この調査が行われたのが、４月下旬である。本実践を初めてから２週間足らずではあるものの、この２週間の中で彼らが前向きに自分の将来について考え始めている様子がうかがえる。そしてもう一つ学習についての変容が見られるデータがある。

相模原市立相武台小学校生活アンケート
（５）「勉強の内容がわかる」

	よく当てはまる	少し当てはまる	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
５年１学期	１８	２２	８	１
６年※３学期	２４	２４	１	１

※転入児童１名を含む（人）

本校で毎学期取り組んだ生活アンケートの結果だ。今回の総合での取組をうけて、さまざまな学習に前向きに取り組んだ結果、５年１学期に比べて多くの児童が「勉強がよく分かるようになった」と答えているのではないだろうか。

その他の各児童の変容については、これまで各章で述べてきた通りだ。もともともっていた夢に新たなキーワードが加わったＡさん。身近な大人の一言から働く上で、生きていく上で大切なことに気づいたＢさん。出会った大人の姿から、夢をもつこと以上に大切なことがあると知ったＣさんなど。どの子もまさに「夢を越えて生き方を考える」姿であった。そんな子ども達の姿に出会えたことが本実践の最も大きな成果だった。

２　課題

今回の取組は、この学年の子ども達の特徴を踏まえて、これまで相武台小学校で行っていたものをつなぎ合わせ、発展的に行ったものである。一部での取組に終始してしまうと、「相武台」の子ども全体で、キャリア発達を促進することにはつながらない懸念がある。そこで、真に教育効果のある学びとして連続性をもたせていくためには、以下に挙げる三点のつながりを念頭に置き、今後改善していかなければならない。

（１）中学校とのつながり

学習指導要領（総合）の例示を見ると、

> 中学校編（７）「職業や自己の将来に関する学習を行う際には…（後略）」

とキャリア教育について挙げられている。進路選択の時期に当たる中学校では、職業体験活動を中心としたキャリア教育が行われていることが多い。そのことを鑑みると、小学校での活動を中学校と共有せずに終わってしまうと、学びが断続的になってしまったり、同じ事をくり返しおこなってしまったりと、キャリア教育としての教育効果が薄れてしまうことが危惧される。このような理由からも近隣の中学校と密に情報交換を行い、連携を図っていく必要がある。

（２）地域とのつながり

学習指導要領（総合）小学校編《指導計画の作成と内容の取り扱い》では、

> （２）「地域や学校，児童の実態等に応じて…」
> （５）「地域や学校の特色に応じた…」

と、地域とのつながりの大切さが示されている。しかし、今回は初めての試みだったため、地域教材の開発が難しく、映像資料での間接的な関わりが多くなってしまった。地域に根ざしたキャリア教育にしていくためには、「相武台で働く人」に目を向け、他学年ですでに関わっている地域の方にお願いする方法が考えられる。

（３）他教科・他学年とのつながり

同じく学習指導要領（総合）小学校編《指導計画の作成と内容の取り扱い》には

> （１）「全体計画及び年間指導計画の作成に当たっては、学校における全教育活動との関連の下に…」

とある。本実践は、前述のように各教科との関連、つまり横のつながりを意識して取り組んだ。しかし、それだけでなく、各学年との縦のつながりも意識していく必要がある。特に、総合的な学習の時間・道徳・学級活動などの時間においては、各学年の系統性から「相武台の子どもに身につけさせたい力」をキャリア教育の視点で捉え直すことが大切である。

Ⅶ　終わりに

この１年間の学びが果たして、彼らの人生においてどれほどの意味をもつのか、すぐに答えは分からない。なぜなら、自分の生き方を見つめたり、立ち止まって考え直したりする場面は、一人ひとりの生きていく道によってさまざまだからだ。もしかしたら、今回の学習が全く効果を現さない子もいるかもしれない。

しかしそれでも、私は今回の学習のように常に目の前の子どもの「先」を考え、「今」の彼らに必要だと感じるものを与え続ける教師でいたい。そんな未来志向の教育こそが、困難なことが多いこれからの社会で、彼らの未来を明るく照らす道しるべになり得ると信じてやまないからだ。

引用文献

学習指導要領（総合）小学校編・中学校編
神奈川新聞　わが人生⑩(2011)
文部科学省（2011）
小学校キャリア教育の手引き
中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
子どもの貧困対策の推進に関する法律(2013)